アウクスブルクでの素晴らしい思い出

余田太毅

はじめに

今回、尼崎市青年使節団の団員としてドイツのアウクスブルク市に訪れたことをとても光栄に思う。2024 年に兄が使節団となり、アウクスブルク市へ訪れたことをきっかけに「ドイツへ行ってみたい」と考えていた日からあっという間に月日が経ち、気が付いたら日本へ帰国していたような感覚だった。ドイツへ行く前は、最初はなにもかも不安だらけだったが、市のサポートやきれいな街並み、そしてなにより年齢や国籍を問わず親切にしてくれた方々のおかげでその不安は気付けば安心に変わっていた。今回、私の滞在記には日程事に自分自身が経験したさまざまな内容を記していこうと思う。

1 日目

空港に到着し、初めて乗る 2 階席もある大型バスに乗った。そこで楽しかったのが、ドイツの景色を眺めたことである。初めて見るヨーロッパの街並みに感動し、ジョギングをする人やテラス席のあるカフェでお話をされている人々を見て、本当にドイツに来たんだなと改めて実感することができた。また同日は、ホストファミリーとの初対面であり、会う前は「どうやって仲良くなろう」「英語力が落ちていないか」などの心配と緊張もあったが、とても陽気で気さくなホストマザーのおかげでこれでもかというほどすぐに慣れた。家に到着すると、ホストマザーにサイクリングをしないかと誘われた。私は正直、飛行機での疲れとシャワーを浴びたい気持ちもあったが、この貴重な体験を無駄にしてはいけないと思い、サイクリングをすることにした。人口の川が街全体に流れ、大自然と言わんばかりの木々達を颯爽と漕いで進む瞬間は、とても気持ちよく、爽快感があり、サイクリングとアウクスブルクをより一層楽しめる時間となった。



サイクリング中の写真

2 日目

最初に訪れたのは、ディーゼルハインと呼ばれる場所だ。そこで、ディーゼルエンジンを発明した歴史を学んだ。日本とドイツの関係性、そして日本にはない草の壁に囲まれた場所は、とてもきれいで心を浄化された気分であった。次に向かったのはこの旅で印象に残っている日本庭園訪問だ。ここには薬の花や食べられる花、そして日本をモチーフにした庭園があった。そこはとても美しく、日本のリスペクトが感じられる素晴らしい場所であった。午後にはグランドホテル・コスモポリスに訪問した。床のタイルや電気や机は全て貰い物で、お金をほとんど使わない施設の発想がとても豊かに加え、難民や海外からお越しの方々などの

ためにつくったその熱意と善意は、グローバル化する今の時代にとても必要なことであると感じた。



日本庭園訪問

3日目

ロココ・ホールで表敬訪問を行った。今までの訪問よりもきちんとしたものであったため、少し緊張はあったものの、最後までやりぬくことができ、自分の名前を書く際にもきれいな字でかけたので嬉しかった。また、公共図書館にも行き、そこではまだ言葉も会話もわからないような子供たちをいち早く文字や読書に慣れさせる早期教育をする素晴らしい場所であった。またギターやゲーム機の貸し出しも行っており、娯楽や音楽に対する好奇心のスタート地点になれるようにする姿は、ただの図書館でなはなく、子供たちを一番に思い大切にしていることがわかった。

4日目

この日は、あるテーマパークのシンデレラ城のモデルとなった、待望のノイシュバンシュタイン城の見学だった。外観の美しさはもちろんのこと、内装もとてもきれいですべてにおいて美しいお城だと感じた。キッチン、寝室、王の間、客室部屋、そして心を落ち着かせる部屋などさまざまな工程に対して部屋が用意されており、その量の多さに驚いた。帰りは馬車に乗っての移動で、初めての馬車だったためとてもわくわくしながら帰ることができた。また、ヴィース教会にも行った。そこはとてものどかな場所で、見渡す限り草原のような場所であった。さらに、子ヤギや馬などが飼われていて、私がヤギに「メ～」と挨拶をしたら返してくれたのがとても癒された。



ノイシュバンシュタイン城

5日目

この日は、WWK アリーナに行った。なかなか訪れることができない掃除中のグラウンドに直接入ることができ、実際に選手が入場する所から入れたのがとても嬉しかった。

また、ダッハウ強制収容所にも行き、ナチス政権時代にドイツで起こったこと、罪のない人々がヒトラーによって虐殺されていたことを考えると、とても胸が苦しくなった。しかし、ドイツの第二次世界大戦の行為を改めて学んだことで、帰りの飛行機で普段は絶対見ない第二次世界大戦のドラマを見てドイツの歴史をさらに学ぶことができた。



1 年ぶりの再会時の写真

6 日目

この日は、今まで一生懸命準備を行ってきた送別会があった。直前に席の配置やどのくらいの人数の方が来るのかを知り、尼崎市の皆で調整を行っていたことを考えると、ちゃんと使節団だな～と感じた。また、昨年、アウクスブルク青年使節団が尼崎に来た際に、ホストファミリーとして迎えた団員とも、約 1 年ぶりに再会することができ、この旅のなかで 1 番感動するものになった。彼の姿はほとんど変わってはいなかったものの、日本留学を経験した彼はとても勇敢な眼差しと立ち姿で、私も彼のように漢らしい人間になりたいと感じた。本番は大きなミスもなく来場者もとても温かい空気にしてくれたおかげで大成功だった。ドイツに行く前にしっかりと研修で学んだことがどれほど大事か改めて感じさせられるものであった。また、彼とのお別れはとても寂しかったが、なんとか涙腺がゆるむのをこらえ、笑顔でさよならを言えたことは、思い出に残る送別会となった。

7 日目

この日は、ホストファミリーとの一日で、私はアンデクスと呼ばれる教会、ヴェルト湖、近所のバスケットコートの 3 か所に行くことができた。アンデクスは山の上にある教会で、その時は曇っていてわからなかったが、写真を見せてもらうととてもきれいな景色が広がっていて美しい教会だった。次のヴェルト湖に向かっている途中で晴れたため、着いた時にはきれいな青空で嬉しかった。湖はとてもきれいな透明なエメラルド色で、見ているだけ気持ちが癒された。バスケットコートでは、近所に住む人 10 人で 5 対 5 の試合を行った。私と同じく 10 代の人や 40 代の人、そして親子できた人達とバスケをして、試合中などに声をかけてくれて仲良くなれたことがうれしくて、とても楽しい経験となった。



ヴェルト湖

最終日

帰国の日、ホストファミリーに手紙を書き、机の上に置いたままにするというロマンチックなことをしたが、ホストマザーが気付いてくれず、結局連絡を送ったのは良い思い出である。翌朝、ホストマザーは仕事で帰りのバスの見送りには来れなかったものの、毎日集合場所に送ってくれた別の方のホストファミリーの方と挨拶ができ、悔いなくアウクスブルクを去ることができた。

おわりに

今回の使節団での経験を通じて、私は今の時代を生き抜く人間としての価値観の理解、そして何事にも恐れない自信が身に付いたと感じる。宗教や政治、国籍による価値観の違いは必ず存在する。しかし、それに対して否定をするのではなく、それを受け入れることがなによりも大切なことを改めて学んだ。加えて、様々な場所に行き、様々な人との交流をしたおかげで、どんなことにも屈しない自信を身に付けることができた。英語もうまくしゃべれない、人見知りの私がこんなにも自信が身に付いたことは、このプログラムが非常に有意義であることを示すと同時に、日本とドイツの関係性をより良くさせることにつながる懸け橋となり重要な事である。

この経験を決して忘れず、これからの人生と将来に活かしていきたい。そして、またアウクスブルクを訪れたいと心から願っている。